



# 歌のよしあし 本文 口語訳

赤シートを使って暗記・確認用に利用して下さい。

各傍線は、それぞれ 敬語(動詞) 敬語(補助動詞) 助動詞 助詞など(重要語句等) を表す

和歌のよしあしを知ることをいふは、格別のうまいであるよした。

歌のよしあしをも知らむじとは、じつのほかのためしなめり。

四条大納言に、子の中納言が、「和泉式部と赤染衛門ではどちらが(歌人として)優れているか。」とお尋ね申し上げなせう。たじろ

四条大納言に、子の中納言の、「式部と赤染と、いつれかまをれるぞ。」と尋ね申されければ、

(大納言が)「一言で言える歌人ではない。式部は、『ひまこそなけれ草の八重ぶき』と詠んだ者である。

「一口に言ふべき歌よみにあらず。式部は、『ひまこそなけれ草の八重ぶき』とよめる者なり。

たいへん素晴らしい歌人である。」と言ったので、中納言は、不思議に思いつ

いとやむじとなき歌よみなじ。」とありければ、中納言は、あやうげに思ひひ

「式部の歌では、『はるかに照らせ山の端の月』と申す歌が、よい歌と、世の中の人は申しているものだ。」

「式部が歌をば、『はるかに照らせ山の端の月』と申す歌こそ、よき歌とは、世の人申すめれ。」

と申しなせう。たじろ、「そなたよ、人々は分らないことを言つのだよ。『暗きより暗き道こそ』と詠んだ句は

と申されければ、『それぞ、人のえ知らぬことを言ふよ。』暗きより暗き道こそ』と言へる句は、

法華經の一文(の引用)ではないか。だから、と申して思いつたのだらう。じつは思われな。

法華經の文にはあらずや。それば、いかに思ひよりけむともおぼへず。

下の句の、『ちんかに照らせ』と詠んだ句は、上の句に引き出されて、たやすく詠まれたのだらう。『いやとも人を』と詠んで

末の、『はるかに照らせ』といへる句は、本にひかされて、やすくよまねにけむ。『いやとも人を』といひつ

『ひまこそなけれ』と詠んだ歌は、並みの人間の思いつける事ではない。素晴らしい事である。『と申しなせう。たじろ。』

『ひまこそなけれ』といへる言葉は、凡夫の思ひよるべきにあらず。いみじきとなり。とぞ申されける。

考慮すべき人物関係他

四条大納言＝藤原公任、中納言定頼の父、歌人・歌学者、漢詩・和歌・管弦に優れた者をそれぞれの船に乗せる場面、道長が公任にだけ

この船に乗るか尋ねた「三船の才」の話は有政「こいつを知らずに古典はやつてられない。」和漢朗詠集」編、いここ藤原佐理

子の中納言＝藤原定頼、公任の子、当然ながら本文に於いて身分は、『大納言(公任)、中納言(定頼)、筆者(俊頼)』の順。

式部＝和泉式部、王朝時代第一級の女流歌人、小式部内侍の母、著書に「和泉式部日記」(ただし藤原俊成の著作との説あり)。

赤染＝赤染衛門、石川五右衛門(ルパン)やドラえもんの影響で男と思われる事が多い悲運の女流歌人、和泉式部とは女房仲間、互いに

歌を詠み合うなど親しかったらしい。『栄花物語』の正編の作者が、紫式部は和泉式部をボロクソに批判し、赤染をべた褒め。

俊頼＝源俊賴、歌人、藤原俊成・定家父子ら新古今歌人に多大な影響を与え、『金葉和歌集』の撰者、家集に『散木奇歌集』。

註解に際して

今回の単元に於いて重要なのは、『婉曲の助動詞』である「む」及び「めじ」、『過去の原因推量の助動詞』である「けむ」の二語三語だとい

と思われま。敬語表現も若干出てきてますが読解難度はそれほど高くはなく丁寧には読めば理解できる範囲であるとの認識の下、詳細な

説明は割愛します。尚、毎度毎度登場して、意外と無視できない単語に、『確定条件の接続助詞』の「ば」があります。未然形接続が

已然形接続かによって仮定条件・確定条件に変わります。また、確定条件の中でも、文脈により「原因・理由の「ば」」「偶然条件の「ば」」「

恒時条件の「ば」と解釈が変わってきます。個人的には「この「ば」は古典読解に関してかなり重要なポイントにあるのでは」と思っ

てお。余計なお世話ですが、参考までに、私が文法書に於いて開く頻度の高いページを挙げておくと、  
一 表紙裏の見開き、助動詞の一覧表、かなり頻繁に。  
二 九七ページ、接続助詞「ば」の用法、その都度。  
三 五八ページ、推量の助動詞に関する基本事項、思いつけない時。  
四 裏表紙裏の見開き、助動詞以外の一通りの語の活用及び意味・用法の一覧、用言の活用の確認。  
五 一〇八ページ、係り結びの解説時、及び忘れた時。